

VI 総 括

1 特 論

(1) 滝ノ沢遺跡における縄文土器の使用痕 (第285～338図)

＜目的＞前期末～中期初頭の大木式土器の深鉢は、長胴形と球胴形が併存する。球胴形は、北部と南部のそれとは異なり、北部では新しくなると南部の影響を受けるという（今村 2010）。このように複雑な様相を示すが、その理由が何にせよ、北部でも南部でも、この時期の大木式土器分布圏において、この器形を必要としたことは間違いない。その理由はなぜか。球胴形に特別な用途があったと考えるのが自然であろう。ここでは、その可能性を探るために、スス・コゲ使用痕について検討する。

＜方法＞2004（平成16）年12月に当センターにおいて北陸学院短期大学的小林正史氏を講師に招いて焼成時の黒斑、使用時のスス・コゲについてのワーク・ショップが開催され、筆者も参加した。その時の経験をもとに、筆者が作業員に指示して実測してもらったのが第285～338図である。底まで残っていないと意味がないが、方針を徹底できず、またせっかく実測したのだからと全て掲載した。また、今回対象となった土器の黒斑がわかりづらく、さらに元々短時間の研修であり、ワーク・ショップから6年も経過して筆者の記憶も曖昧で、間違いが含まれている可能性が高い（以下の記載についても同様である）。ご配慮いただければ幸いである。

＜結果＞第285～338図に示した。土器の番号は、第34～184図と同じである。器形・法量別にまとめて掲げたが、上記のとおり黒斑は確かでない。

＜考察＞古くから、「球胴形深鉢は筒形の胴下半部と球形の胴上半部下側が激しく被熱して赤変しているものや、内外面、とりわけ内面に炭化物が付着したものが多く、この点については熱効率をよくするために改良された器形であるとの指摘がなされている（柏倉他 1955）」（稲野 1991：p.1）。今回の観察でも同様の感想を持ったが、長胴形と比べて明確に一線を描くほどの違いはないし、「改良」形なのに、なぜ時期が限定されるのか、わからない。今回の検討では、器形・法量別に何らかの傾向を読み取ることはできなかった。

＜類例との比較＞特にこの時期のスス・コゲを扱った報告書や論考は今回見つけることは出来なかったが、北野博司氏が山形県押出遺跡の分析の中で若干ふれている（北野 2009）。調理実験によっても、球胴形の熱効率の良さは実証され（同：p.232）、オキ火にかける際の有効性を指摘しているが（同：p.229）、浅さと容量の少なさを指摘し、中期前葉の器高の高い器形を志向する流れの中で球胴形が消滅すると述べている（同：p.228）。どちらかと言えば、球胴形の消滅の原因としては文様装飾のし好の変化など実用的機能以外を考えているようだ（同）。

消滅が文化的原因によるとしたら、隣接地域との関係が注目される。南部の浮線文系球胴形土器は、関東・中部地方と強い共通性を持つ（今村 2010：p.200）。さらに、関東地方と東北地方南半部（の少なくとも岩手県域）では、遺跡、遺物の多寡がこの時期ネガ・ポジの関係になっているが（今村 2010：p.206）、東北地方に多い時期（大木6～7 a式前半）にしか球胴形が認められず、関東地方で回復すると消滅してしまう。これらの属性を元に内容物を検討して、その意義が検討されることになる。今後の議論の高まりに期待したい。

参考文献

- 稲野彰子 1991「大木式土器にみられる球胴形深鉢について」『北上市立博物館研究報告書』第8号
 今村啓爾 2010『土器から見る縄文人の生態』同成社
 柏倉亮吉・江坂輝弥 1955『吹浦遺跡』サイエンス社
 北野博司 2009「押出遺跡の土鍋の作り分けと調理」『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』

(2) 滝ノ沢遺跡における縄文土器の編年(第339～367図)

これまで述べてきたように、今回の調査では出土状況に基づいて土器を分類するのは難しい。したがって既存の編年に従って分類せざるを得ない。今回出土した土器のほとんどは大木6式～大木7a式で、この時期の編年は近年今村啓爾氏が詳細に扱っており(今村 2010)、本書ではこれに従って比較的残りの良い土器を並べることとした(第339～367図、一部他時期の土器含む)。この時期には、宮城県嘉倉貝塚等の出土状況に基づいた編年があるが(千葉 2007)、型式学的検討が少なく、これに基づいて資料操作するのは難しい。変遷の方向に限れば今村氏の編年をほぼ支持している。また、大木6式については、松田光太郎氏の層位的事例を重視した編年もあるが(松田 2003)、ややわかりづらくて、やはり資料操作は難しく、何より大木7a式については細かく扱っていない。

単純にわかりやすく資料操作しやすいという点で今村氏の編年に従った部分が大きいため、その妥当性にまで目配りできているわけではない。実際に資料操作してみて、氏の5期を峻別するのは難しく、一つの独立した型式足りうるのか疑問を持ったことも確かである。ともあれ、氏の編年に従った結果、今回の出土土器は大木6式3期とその前後が多いことがわかった。これまでの滝ノ沢遺跡出土土器をみると、地点の離れた2005年度調査区(第Ⅱ章文献146)は別にして(大木8a式が多い)、ほぼ同様の傾向が認められるようだが、1990(第Ⅱ章文献100)、2001・2002年度調査区(第Ⅱ章文献130)では、大木7a式土器が目立つ。若干の地点差があり、南にいくほど新しい土器が多くを占める傾向があるのだろうか(第6図)。

参考文献

- 今村啓爾 2010『土器から見る縄文人の生態』同成社
 千葉直樹 2007「宮城県における縄文時代前期後葉の土器に関する一考察」『考古学談叢』六一書房
 松田光太郎 2003「大木6式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』第39号 神奈川考古同人会((財)かながわ考古学財団内)

(3) 滝ノ沢遺跡における玦状耳飾(第381図)

(a)資料

今回の調査では、8点、明らかな未成品も8点出土し、これまでの調査では、35点(+土製1)(第Ⅱ章文献87に25点、99に2点、100に1点+土製1、130に5点、52に2点掲載)出土している。

滝ノ沢遺跡出土玦状耳飾の平面形は、一般に広く知られる(川崎 2004、日本玉文化研究会 2010、福田 2006)円形(第381図33)や三角形(第Ⅱ章文献87:実測図版42の33、35、46)もあるが、長く、糸切鋏状を呈するものが多い(第381図34、35ほか)。在地のものであろうか。

石質。北上市教育委員会調査分については未鑑定のもものがほとんどだが、第Ⅱ章文献99の長楕円形2点は、砂質泥岩、泥岩と観察表にある(同文献:p.61)。当センター前回調査分(第Ⅱ章文献52)の楕円形?の2点は、北上山地産の滑石とされた(p.297)。今回調査分は、一般的な円形の第381図33は、北上山地(早池峰山地周辺)産ではあるが蛇紋岩、凝灰岩製の3点は、第381図34、38が長形、40が円形?と様々で、滑石製の4点(第381図35、36、37、39)は、概ね長形で一致する。明らかな未成品の8点は、孔を持たない長楕円形の1点(第381図47)が頁岩の他は凝灰岩である。

(b)時期